
Game of Gather of Wish

柊 玖遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Game of Gather of Wish

【Nコード】

N2887W

【作者名】

柊 玖遠

【あらすじ】

Game of Gather of Wish
- 願いの集まりしゲーム -

この物語はLive or Dead Crisisゲームという王に勝てば

なんでも一つ願いが叶うというゲームである

そのゲームにとある事件で妹を亡くした主人公が

あることがきっかけでそのゲームに参加することになる

主人公はこのゲームの中で色々な人と出会い
王に挑戦する主人公を描いた物語である

プロローグ

Live or Dead Crisisゲーム、略してLDC、それは強い願望を持っている人間のみが参加できるゲームである。

- プロローグ -

「お兄ちゃん……沙耶ね、お兄ちゃんに言いたかったことがあるの」
「ん？ 言いたいこと？ でもごめんな……俺、遊びにいかなきゃいけないからまた後で聞いてやるよ！ じゃいつてきます」

「やばい遅刻だ！ 急がないと間に合わないよ」

急いで走っていると車の急ブレーキの音と重なにか重いものが地面に叩きつけられた音がした……振り返ってみるとそこには横たわって寝ている女の子がいた

「ん？ 沙耶ッ！」

沙耶は俺の後をついてきてたらしくトラックに跳ねられて道路に横たわっていた俺はすぐに救急車を呼んだだが沙耶はそのときもう息はしてはいなかった

すべての始まり

「お兄ちゃん……沙耶ね、お兄ちゃんに言いたかったことがあるの」
「ん？ 言いたいこと？ でもごめん……俺、遊びにいかなきやいけないからまた後で聞いてやるよ！ じゃいつてきます」

「やばい遅刻だ！ 急がないと間に合わないよ」

急いで走っていると車の急ブレーキの音となにか重いものが地面に叩きつけられた音がした……振り返ってみるとそこには横たわって寝ている女の子がいた

「ん？ 沙耶ッ！」

沙耶は俺の後をついてきてたらしくトラックに跳ねられて道路に横たわっていた俺はすぐに救急車を呼んだだが沙耶はそのときもう息はしてはいなかった

「うわっ……またこの夢か……やっぱり沙耶は俺のせい……あのとき沙耶はなにを言いたかったんだろうか……もう一度沙耶に会えれば」

俺はここ最近になって5年前のある事故のことがよく夢にでてくるようになった

それまでは月に一回あるかないか程度であつたのだが、最近は一週間に三回くらいの割合でこの夢を見るようになった

ある事故とは「小学3年生のある女の子がトラックに跳ねられて即

死した事件」だ

普通の人からみれば普通の小学3年生がトラックに跳ねられて、即死ということで普通の事故なのだが、俺には他人事のように流せるような事件ではなかった

ある女の子……それは俺、柊 鏡也の妹、柊 沙耶なのだ

沙耶は俺に言いたいことがあつたらしく、それを無視して遊びにいつてしまった俺の後をついてきて事故にあつた

俺は今そのとき少しくらい遊びに遅れてでも妹の話を聞いてやればと後悔している……

今になって沙耶が言いたかつたことがなんなのか気になっている……もう一度沙耶に会えれば……

そんなことを思っていたら

「気になりますか？ あなたの妹さんがなにをいいたかつたのか」そこには黒い燕尾服をきた黒い短髪の男がそう話をかけてきた

「うわッ！ 誰だよお前！ つかなんで勝手に家に上がりこんでるだ！」

「申し送れました、私はゲームの主催者の使いのもので佐藤と申します、貴方をゲームに招待するために参りました」

「ゲーム？」

「そうです。ゲームは強い願望を持ったもののみが参加できるゲームです。このゲームで私のオーナーに勝つことができればなんでも一つ願いが叶いますよ？」

佐藤は不吉な笑みを浮かべてそう言った

「なんでも？ 沙耶にもう一度会うこととかもできるのか？」

「もちろんですよ。 そうですね？ ゲームに勝利してもう一度妹さんに会われてみてはどうでしょうか？」

「でも……」

「強制参加ではありません。 もし参加する意思があるのであればこちらをお読みください」

佐藤はそう言つて黒い封書を渡してきた。

「その中には簡単なルール等が入っています参加なされる場合は契約書をご記入のほうお願いいたします、記入した時から貴方はもうゲームに参加したことになります」
「……って佐藤はいなくなつた。」

「ゲームに勝利したらなんでも願いが叶う……そんな馬鹿げたことがあるわけない……けど、もし存在するなら……」
「俺は佐藤が残していった黒い封書を見つめた」

「見るだけみてみるか……」

「ルール」

ゲーム、それは強い願望を持ったもののみが参加するゲームである。ゲーム参加すると一つ能力が与えられる。

その能力を使い戦いGPを稼ぐ必要がある

GPはゲーム世界の金であり一定のGPを払うことによってゲームマスターに挑戦することができ、ゲームマスターに勝利したら願いが叶うただし願いを叶えたらこの世界に関する記憶が消える

「契約書」

幾年を経て奪い続ける欲望はあるか

幾年を経て狂い続ける覚悟はあるか

幾年を経て傷付き続ける気迫はあるか

幾年を経て喰らい続ける邪欲はあるか

幾年を経て願い続ける希望はあるか

貴公が如何なる行為を以ってしても、願いを叶えたいならば貴公の名を此処へ記せ

「

」

「如何なる行為を以ってしても、願いを叶えたい……か、俺は沙耶にもう一度会いたい」

俺は覚悟を決めて契約書にサインをした……
その瞬間契約書が光りはじめてその中に俺は消えた……。。

出会い

「ゲームの参加ありがとうございます」

頭の中に直接声が流れた。

「どこだよ……」

そこに広がっていた光景はまさにデジタルの世界で緑色のよくわからない文字がまわり にいっぱいありそれが随時変わっていた
「ここはゲームの世界です、今回ゲームについて説明させていただきます
くゲームサポーターの リンフィアと申します、今こちらから貴方の脳に直接話しかけていますので違和感があるかと思いますがご了承ください」

「ああ、我慢できるレベルだ、さつさと説明を済ませてくれ」

俺は沙耶に早く会いたいの一心だ

「わかりました。早速説明に移らしていただきます、最初に黒い封書に書いてあった通りこの世界では能力が重要になってきます。
このゲームに参加すると能力は手にはいります、なのでいま貴方にも能力があります

能力はその人の願望の強さによってレベルが分かります、レベルは七から一でわかれて おり7はゲームマスターになります」

「俺はレベルいくつ？」

「レベル二になります」

低い……俺はそんなにゲームマスターに勝って沙耶を生き返らせることができるのだ ろうか……いや駄目だ……弱気になんかな
っちゃ……

俺はゲームマスターを倒して沙耶を生き返らせる……そのために
来た

「その能力を使って他のプレイヤーを倒しGPを手に入れてください。ゲームマスターに 挑戦するには1,000,000GPが必要ですよ。 GPはこの世界のお金そのものなのでGPがないと食事もとれません」

「倒すとどのくらいのが手に入るんだよ」

「いい質問ですね。 一人倒すことによって得られるGPは人それぞれですがレベルが高 いほうがGPは高いですね」

「だからいくら聞いてるんだよ！」

「レベル6を倒すと100,000GPでレベル1だと100GPといったところでしょいか」

「レベル6を10人も倒さないといけないのか……」

「ですがそれ以外でも町で月に一度開かれるイベントに参加して優勝したり、町の外れに いるモンスターとかを倒してでもGPは獲得できますよ」

モンスター……どんなやつなんだろうか

「これで説明が終わりました。

それではいよいよゲームに参加していただきます、いってらっしゃいませ」

リンフィアが最後に不吉な笑みを浮かべていたような気がしたが
いまの俺は気にはなら なかった

「ここがゲームの世界か、現実と大差ないな……」

そこには見晴らしのいい草原が広がっていた

「それにしても俺の能力はどんなのなんだろうか……レベル2か……」

そんなことを考えているとき後ろから空気を切るような音がした

「その君！ 危ない」

遠くから黒髪のいかにも可愛いらしい女の子がなにかを叫びながら走ってきた

もの音がしたほうを向いてみるとナイフが飛んできていた

「！？」

俺はなにが起こったのかわからなかった振り向いたときにはもうそのナイフは地面に叩き付けられていた

「間に合ったわね……」

「チツ、殺し損ねた……」

ナイフを投げつけてきた奴はいつの間にかいなくなっていた

「逃げられたか……というかごめんなさいね」

巻き込んだじゃって……私は日向凛、貴方は？

「俺は柊鏡也、さっきのはいつたいたいなんだったんだ？」

俺はまったく状況が把握できてない

「え？ 殺し合いよ」

「こッ殺し合い！？」

「そうよ？ 貴方このゲームがなんなのかわかってる？」

俺はまったく理解できていなかったこのゲームがどんなゲームなのか……

（……なんなんだよこのゲーム）

「なんも知らないみたいね。このゲームは殺し合いをするゲームなのよ簡単に言っとね」

俺は正直日向凛という人物の言っている意味がよくわからなかった

「どうゆうことなんだ？ 殺し合い？」

「貴方はなにか叶えたい願いがあるからここにきたんでしょ？ それを叶えるためにはG Pが必要ということはゲームサポーターから聞いたわよね？」

「ああ」

「そのGPは他のプレイヤーを殺して手にいれるのよ？」

殺すだと？

「殺されたやつはどうなるんだ？」

「もちろん死ぬに決まってるでしょう なんでも願いが叶うんですもの、それなりのリスクがあつて当然だわ」

負けたら死ぬ…

「拍子抜けした顔ね、貴方の能力はなに？ それを使って自分を守ればいいじゃない」

（能力…でも俺はレベル2だ 勝てるわけがない…死んで俺は終わるのか？）

「ねえどんな能力？ って聞いてるんですけど」

「ああ、すまん…能力、それがなんなのかわからないんだ」

「わからない！？ 貴方もしかしてルーキー？」

彼女は驚いた顔でそう聞いてきた

「ああ、いまさつき来たんだ」

「そう、じゃあ仕方ないわね 少しだけ一緒に行動してあげるわ協力したほうがGPも 早く貯まるしね」

日向 凜が協力してくれると言ったとき少し安心した俺がそこにはいた、まだあつてか 少ししかたつてないけど信用しても良さそうだ

「まずはどうしましょうか」

「どうしようかと言われても…俺はまだなんにもわからないから日向に任せるよ」

「日向なんて堅苦しい呼び方はやめてよ、これから協力する身じゃない、柊くん」

「ならなんて呼べばいいんだ、つかそうゆうなら俺のこと柊くん

「つうのはやめろよな」

はつきりいつてからかわれてるのかと思った

「そうね、私のことは凜でいいわよ？ 柊くん」

また呼ばれた……柊くんかなれないな

「柊くんはやめろって……俺も鏡也でいいよ、凜」

いきなり呼んでしまったが大丈夫だろうか？

「わかったわ鏡也、改めてこれからよろしくね」

「おう！　つか今はどこに向かっているんだ？」

適当に歩いてるだけなんだろうか？

「んーそうね……どこ向かっているんでしょうね？」

「ッおい！　目的地ないんかい！」

思わずツツコミを入れてしまった……

「ふふつ、いいツツコミね！　まあ目的地はちゃんとあるわよ……」

「あるんかい！」

またツツコミを入れてしまった……

「ふふつ、またいいツツコミね鏡也センスあるわね」

なんか褒められた……でも喜んでいいのか？

「んで結局どこに向かっているんだ？」

結構気になっていたので話を戻してみた

「最初の町マサラタウンじゃなくて！　ホープタウンよ」

マサラタウンってあの某人気モンスターゲームの最初の町じゃね

ーか！

「……」

「いま鏡也マサラタウンってあの某人気モンスターゲームの最初の

町じゃねーか！　って心　の中でツツコミいれたわよね？」

なんでわかった？　こいつエスパーか？

「……」

「凶星ね！」

「ホープタウンってどんな町なんだ？」

軽くスルーをして話題を変えてみた

「無視！？ ま、まあいいわホープタウン……それは希望の町よ！」

こいつやるわね……と凜は心の中で思っていた

「そのまんまじゃねーか……」

またツツコミをいれてしまった……

「ま、まあそうね！ まあルーキーにとってはちょうどいいんじゃないかしら？」

「そうか……まあ凜に任せるから」

とりあえずいまは凜を信用して任せるしかないと思った

「任されてもね……あ、着いたわよホープタウン」

そこはかなり人がいて賑わっていた

「すごい人だな……つかこんなにゲームに参加しているやついるのか？」

「まあ初心者の方だしね……ルーキー狩りする奴らもいるから気をつけたほうがいいわよ？ まあ私がついてるから大丈夫だとは思っけどね」

ルーキー狩り？なんだ初心者を狩るのか？

「ルーキー狩り？」

「その名の通りよ、初心者を狩るのよ」

また物騒な……まあそうゆうゲームだからしょうがないのかな……
「狩ってどうするんだ？」

「GPを獲得するに決まってるじゃない」

「でもレベルが低いやつはそんなにGPもらえないって……」

「ルーキーでもレベルが高いやつなんているわよ、レベルはその人に願いの強さで決められるんだから」

そうなのか……でもどうやって技とかを出すんだろうか……

「まあまず鏡也は能力を使えるようにする必要があるわね……」

「どうやるんだ？」

能力が使えないとかバトル以前の問題だ……

「それはわからないわ……私のときは敵を殺したい！ と思ってい
たら自然に使えるよう になってたわ」

殺意が自然と能力を発揮させるのか？

「敵を殺したい……か」

俺にできるのだろうか……でも能力が発揮しないと願いを叶えることができない……

「あ！ そう言えばまだ凜の能力聞いてなかったよな？」

俺が凜に話しかけたとき、凜の表情が険しくなっていた

「おい……どうし」

たを言う前に凜に静かにするようなポーズをとられたので小声でもう一度話をかけてみた

「おい……どうしたんだ？」

「黙って……誰かがこっちを見てるわ」

「え……」

俺は状況が把握しきれていなかった

誰かって敵かなにかか？

「敵なのか？」

思い切って聞いてみた

「わからないわ……もしかしたら私の能力を拝見できるかもね」

敵！？

もし敵だとしたら危険な状況なはずだ……

俺が能力を使えない今俺は足手まといになる……

「来るわ……」

凜がそついった瞬間後ろの物陰からなにか黒い影が見えた

「くっ……」

凜が振り向いた瞬間凜はその影になにかをされた

「大丈夫か凜！」

「大丈夫よ……それより私の後ろに隠れて」

凜の後ろに隠れる！？ やっぱ俺はなにもできないのか？……

「七色に輝く宝石よ……それぞれの力を今解放して！」

凜の周りの赤、青、緑、黄、茶、黒、白の七色の光輝く石が宙に舞っている

「これが凜の能力……」

「敵の姿が見えないわね……」

凜が能力を出した途端相手の黒い影が見えなくなっていた

「逃げたのか？」

「たぶんそれはないわ、だって気配を感じるもの」

「気配？そんなものは俺には感じなかった

「ふふふっ……お前たちに俺の姿は見えぬよ」

どこからか相手の声が聞こえる

「どこにいるのよ……」

凜も相手が見えなく苦戦しているようだった

「ッ……」

凜がまた攻撃を食らったようだ……

「大丈夫か！？」

「平気よ……こんくらい」

それにしても見えるのは黒い影だけだ……

ん？影……？そうか！

「凜ッ！ 相手は影に隠れているんじゃないか？」

「影！？」

「そうだ！ 毎回凜が攻撃されるときに黒い影が横切った感じにな

ってまた消える……」

「やってみる価値はあるみたいね」

凜がなにかするようだ……

「光を宿りし白き宝石よ……いまその力を発揮しすべての闇を消し去れ！」

凜がそういった途端白い宝石が光だし周りの影がすべて消えたその瞬間そこに人がいた。

「そこねッ」

凜がとっさに赤い宝石を使いその人にダメージを食らわせた

「ぐはッ……ふっ意外とやるな……小娘、今回は見逃してやろう」

そういつて謎の影に隠れていた男は消えた

「逃がしたか……それにしても影に隠れるなんて卑怯ね」
でもそれを克服した凜もすごいと思った

「そうだよな……つか凜、その宝石は何なんだ？」

「これ？私の能力だけど……」

それは知っている！

「いや……その能力の話なんだが」

「ああ、私の能力レインボーストーン、赤が炎で青が水、緑が風、黄色が電気、茶色が土、黒が闇、白が光という一つずつ属性があるの」

色々組み合わせたりもできるわよ」

すごい……組み合わせが無限のような能力だな

「すごいな……ちなみに凜はレベルはいくつなんだ？」

そつえば聞いてなかった

「私？ 私はレベル4だけど……」

「レベル4！？」

俺は正直びっくりした……なんてやつだ……かなり強いじゃないか……

「私も鏡也のレベル聞いてなかったわね……」

でも自分の能力がわからないんじゃないか

「俺か？俺はレベル2だよ」

「レベル2！？ ていうかなんで知ってるの？」

「ゲームサポーターから聞いたんだ」

「へえーそんなことも教えてくれるのね」

「？ じゃあ凜はどうやって自分のレベルがわかったんだ？」

「私？私はレベルチェッカーを使ったのよ」

「レベルチェッカー？」

「そうよ、町に一つ置いてあるわ、有料なんだけどね、なんか変なボックスでね、そこで 能力を使うと自分のレベルが表示されるのよ」

凜は俺が無料で聞いたことに対してちょっと不満のような顔をし

ていった

「へえそんなものがあるのか……つかこれからどうするんだ？」
いきなり敵に遭遇したわけでこの先なにするのか聞いてなかった

「そうねーとりあえず食料でも調達しましょうか」

食料？ 普通に買うのか？

「調達？ 普通に買えばいいじゃないか」

「買う？ 馬鹿じゃないの？ G Pはこのゲームでのお金、食料を買うのにだって G Pはかかる のよ？ 貴重な G Pを無駄にはできないわ」

でも買う以外になにがあるだろうか

「じゃあどうやって食料調達するんだよ」

「ん？ そりゃもちろん狩る！」

狩る！？

「……」

俺はとてつもなく微妙な顔をしていた

「なによその顔」

「狩るってなにをだ？」

「もちろんモンスターよ、最初にゲームサポーターに教えてもらったでしょ！」

ああそうだった……プレイヤーも倒す以外にも G Pを稼ぐ方法があるのかなかってたな

「それにモンスターを倒すことで G Pも手にはいり食料も手にはいる……まさに一石二鳥だわ」

そうだな……俺も戦闘にはなれておきたいし能力も開放したい……俺にとっても好都合か

「わかった行こう」

「じゃ着いてきなさい？ どうせどこかわからないでしょ？」

……まあそうだけど

「はいはい」

「はいは一回でいいって習わなかったかしら？」

「やっぱ言われたか……」

と変なやり取りをしながら歩いていると町外れというべきような場所についた

「なんだここ……ほんとに町外れっう感じだな」

そこは崖のようなものがたくさんありかなり荒れていた……

「あんなにぎやかだった町の裏にこんな場所があったとはね……」

「まあ町はずれでモンスターが住み付いてる場所だからね……まだこの町辺りじゃそんなに手ごわいやつはいないとは思っけど、たまにすごい強いにいるから気をつけてね」

「たまにすごい強いのも……危なくないか？」

「まあ俺も能力が開放できるようにがんばるよ……」

「まあでつかいのにあつたら私を呼びなさい」

俺は改めて頼りになると改めて実感した瞬間、背後からものすごいでかい巨人が現れ

「でたわね……」

「こいつ強いのか!？」

とりあえずでかいので聞いてみた

「そうでもないわよ、でかいけどね」

凜はそういつて七色の宝石を使っていとも簡単にその巨人を倒した

「やっぱ凜すごいな……」

俺は改め凜をすごいと実感した

「そう？ 鏡也も能力があればそのくらいできるわよ

「いや……俺には無理だ、凜だからだよ」

「なんでそんな弱気になってるのよ叶えたい願いがあるんでしょ？」

「うん……」

なんで自分でも弱気になっているかわからなかった

「じゃあがんばりなさいよ」

「おう！ ありがとな凜」

俺は凜に勇気付けられた

「さてと、さつさと食材集めますか！」

「そうだな！能力なくても倒せるやつとかいる？」

「能力が使えない俺も少しは役に立てるかちよつと笑顔で言ってみた
んー素手じゃちよつと無理があるわね」

「やっぱ能力じゃないと無理なのか……」

「そうか……」

「でも！ 大丈夫よ、これあげるわ」

「ん？」

俺は凜からナイフみたいなものをもらった

「ナイフ……？だよな」

「そうよ、能力が低いレベルーの人やまだ能力が開放されてない人
がある程度戦えるようにと町で売ってるのよそれに魔法系の人は
物理な攻撃ができないじゃない」

「なるほど……」

結構ゲームの中は便利なんだなと俺は思った

「まあサンキューこれでモンスターを狩ればいいんだな」

「そうよ、でもさつきみたいな巨人は無理よ」

それはそうだ……だってナイフだし、刃渡りが15cmくらいだ
「じゃどんなやつが狩れるんだ？」

まあ小さいやつだろ……

「小さいやつよ」

そのままの返事だった……

「そ、そうかたとえばだ！」

「たとえばか……まあとりあえず小さいやつよ」

……とりあえず小さいやつと言われた

「まあとりあえず小さいやつなんだな！ わかった」

とりあえずわかったと言って俺は凜と別々に食材を探すことにな
ったが俺が能力が使えるなく大きいやつに出会ったら逃げるしか手
がないためあんまり離れないように言われ

「とりあえず小さいやつと言われてもな……まずモンスターが見つ

からない」

周りには断崖絶壁の崖や大きな岩ばっかだった

「こんなところに小さいやつはでるんだろうか……」

そんなことを思いながら歩いていると後ろから石ころが転がるような音がしたので振りかえってみた

「……」

そこには緑色で身長が80cmくらいの小柄な感じの鬼みたいな奴がいた

「なんだこいつ……」

俺はいきなり出てきたのでびっくりしてただがたぶんそれは凜が言っていたモンスターという奴だろう、手には変な棒つきれみtainなのを持っていた

「これはチャンスだ！」

さっそく狩ろうとナイフを構えた瞬間その緑色の鬼が棒っ切れみtainので地面になにかを書き始めた

「……？　なんだこいつ」

なにかの魔法かと思ったが落書きかとも思ったので気にせず狩りにかかった

俺がナイフを振り下ろした瞬間その緑色の鬼の姿はなかった

「ッ！？　どこ行った……」

俺が回りをキョロキョロ探していると後ろから急に頭に飛び蹴りをいれられた

「ぐっ……」

いきなりなことでもしかも後頭部への蹴りだったためかなりダメーヂを負ったけどそれを気にせず俺はまたナイフを振り下ろしただがまたそこには緑色の鬼の姿はなかった

「すばしっこい奴だな……」

また探していると後ろからなにかを地面に書くような音がしたので振りかえってみると緑色の鬼がまた地面にさっきの途中を書いていた

「なにを書いているんだこいつ……」

俺は様子をうかがいながらこっそりと近寄り一気に斬りにかかった
なにかを斬った感覚はあったがそれは緑色の鬼ではなかった

「石!？」

俺が斬ったのは石だった

「またあいつ逃げたか!」

斬ったあと体制を変えて後ろを向いた瞬間

「鏡也逃げて!」

と凜が言った、言ったと同時にあの緑色の鬼が書いていたものが
光だしその中から緑色 の大きな鬼がでてきた

「なんだこれ!？」

「その小さい緑色のやつはペアコンというモンスターよ」

ペアコン? なんだその変な名前は

凜はつづけて

「そいつの能力はあらゆるところに手に持っている棒で魔法陣を書
いて親を呼び寄せるの よ」

といった

なんだその能力は……

「とりあえずどうすればいいんだ?」

俺は魔法陣のすぐ横にいたため真横に緑色の大きな鬼がいる

「そうね……そのナイフが勝ち目はないわね……とりあえず逃げな
さい!こいつは私がや るわ」

「わかった!」

また俺は凜に頼るしかなかったそんなことを思いながら俺は全力
でそこからにげた

凜は俺が走り始めたと同時に能力である内の赤い宝石を使って敵
を倒した

その後凜は青い宝石を使って小さいほうの敵も倒した

「ふう……終わったわね」

「凜はやっぱすごいな」

「そうでもないわよでもよく攻撃に耐えたわね、結構レアなのよ？
あのモンスター」

「そうなのか？」

意外と驚いた、あんなモンスターがレアだとは思ひもなかった
「そうよ、だから結構G Pも入ったわあなたにもはいつてるはずよ」
「そうやってみるんだ？」

G Pの見方なんてゲームサポーターが教えてくれたか、俺は記憶
をたどったが言っていない気がした

「ああ、鏡也はまだ持っていないのよね」
「持っていない……？なにがだ？」

「なにをだ？」

「G Pカウンターっうアイテムなんだけどそれを持ってるとその場
で所持G Pを確認できるのよ」

そんな便利なアイテムもあるのか……

「じゃあ持っていない俺はどう確認すればいいんだ？」

「バンクに行けばいいのよ」

バンク……？銀行か？

「バンク？」

「銀行のことよ、ゲーム世界はほとんど現実世界と同じよ」

ゲームにも銀行があるとは思ひもなかった

「銀行でどうするんだ？口座なんてもってないぞ？」

「あらかじめ口座は作ってあるのよ、鏡也がそれを持ってないだけ」
「あらかじめ作ってある？持っていないだけ？まったく凜の言っていることがわからなかった」

「どうゆことなんだ？」

「まあ簡単言えばバンクにいつてあなたの情報を入力して指紋とか
顔とかを一致させれば 口座をもらえるわ」

そうなのか……さすがゲームの世界だ

「それでG Pがたぶん今回レアモンスター倒したから結構入ってる
と思うからそれでG P カウンターを買いなさい」

結構はいつてる……？

「結構はいつてるって口座もってないのにGPは溜まるのか？」

「当たり前よ」

なんてゲームだ……結構便利なんだな

「じゃさつそく町に戻りますか！」

「食材はどうするんだ？」

俺はまだ最初の巨人と緑色の鬼にした出会っていないこれだけで
なんとかなるのだろう か「食材？そんなのあるわよ」

凜は満面の笑みで前のほうを指さした

そこには色々なモンスターが倒れていた

たぶんそのモンスターは凜がすべて倒したのだろう

「うわ……さすがだな凜」

「こんなもん楽勝よ」

でもかなりのモンスターが倒れていてさすがに運べる量ではな
かった

「でもどうするんだ？この量……」

「それなら問題ないわ」

問題ない？ いやおありだろ……確実に二人で運べるような量
ではなかった

「問題ないだと？なんだ？RPGでよくあるようにリュックになん
でもはいるみたいな感 じか？」

俺は冗談交じりで言ってみた

「その通りよ！」

凜は自信満々にそう言った、冗談で言ったはずのことが自信満々
にその通りよと言われ たために俺は開いた口が塞がらなかった

「え……」

「なによその顔……」

「いや……まじなのか？」

「まじよ」

「まじなのか……でリュックはどこだ？」

「リュックじゃないわこれよ」

凜はこれよといってなんか丸い輪がついた携帯電話みたいなのをだした

「なんだこれ」

「モンスターを携帯できる機械よ」

また便利な……

「それはどう使うんだ？」

「ん？この先端の輪をモンスターに当てると……」

凜が先端の輪をモンスターに当てた瞬間モンスターが輪の中に吸い込まれていった

そしてその携帯の画面にモンスターの名前と所持数が表示された、画面の中に取り出し というのがあったため、その輪から自由自在にその場で、モンスターを出し入れできる ようだ

「すげえなゲームの世界は」

「まあこれも買えるからGP溜まったら買っておきなさい」

「ああそうするよ」

「じゃさっそく口座を作りにいけますか！」

「そうだな！」

「ここよ」

凜がそういって目の前の建物を指さした、そこには大きくBANKと書かれていた

「ここか……」

そういって俺と凜は建物の中に入った

「なんかいたって普通なんだな……」

中は現実世界の銀行とまったく変わらなく、ATMとかも普通にあ

った、唯一現実世界のと違うと言ったらカウンターにいる人の髪の色が緑や紫の人がいるってことくらいだ……でも流石、ゲームの世界だけあってそんな髪の色でも似合っていた「さて、どうすればいいんだ？」

手続きとやらはどうやるのか知らなかった

「カウンターでG Pカードを発行したいのですがって言えば作れるわよ」

そう言われたので俺はカウンターに行って、凜に言われた通りG Pカードを発行したのですかといってみた

「G Pカードの発行ですね……少々お待ちください」

一分くらいまったところで戻って来た、そして紙をもらった

「ここに記入してください」

と言われたのでその紙に年齢や氏名などをさらっと書いてカウンターの人に返した

「柊 鏡也様ですね、少々お待ちください」

今度は二、三分掛かった

「こちらがG Pカードになります、再発行はできませんのでお気をつけください」

再発行ができない……？これをなくしたらどうなるんだ？

「なくしてしまったらどうなるんですか？」

「G PをBANKで引き落としされる場合G Pカードが必要になりますので、紛失されるとG Pが引き落としできなくなるのと同時にBANKにG Pを預けることもできなくなります」

なんだと……？引き落としができない……？

「ほかに質問等がございますか？」

「いや……」

黙っているとお次のお客様がいるので、と言って追い出されてしまった

「あら、結構早かったわね、どうしたの？ そんな浮かない顔して」「いや……凜、G Pって手に入れたら勝手にこのカードの中にはい

るんだよな？」

「そうよ？」

GPカードの紛失それはこのゲームでの死と同じようなものだった
「じゃあなくしたらもう終わりっつうわけか……」

「まあそうなるわね、このゲームにはGPカードを奪われた人なんて結構いるわよ？」

奪われる……そうか……その可能性もあるんだよな

「それでどうなったんだ？」

「もちろん終わりよ、このゲームから出ることまでできなくなったわ」

「そうか……助かる道はないのか？」

「なくはないわ」

「どうやら助かる道はあるようだ……」

「なんだ？」

「他人のGPカードを盗むのよ」

え……、まあ普通に考えればそうゆうことなのだろう

「GPカードはまったく便利なのが不便なのかわからないけど、カード一枚でGPの出し入れができるのよ」

なんつうカードだ、だからGPカード発行のときに暗証番号とかの設定がなかったのか……

「管理もありやしねーな、GPに関しては」

「まあ利口なひとは盗みに行くこともあるわよ」

これなら力がなくてもGPを貯められてるやつがいるわけか
「さ、さつさとGPカウンター買いにいくわよ急がないと」

周りにはもう暗くなり始めてきていた

「あれ？七時！？もうこんな時間か……」

俺は時計を見た、ゲームの世界も現実の時間と同じ進み方だった

「そうよ！もうお店しまっちゃうわ……」

店？ B A N Kはどうなんだ……？

「B A N Kは閉まらないのか？」

「B A N Kはなんでかわからないけどずっと営業してるわ」

「ここは違うんだな……現実と

「何時に店って閉まるんだ？」

「八時よ、でも飲食店は十時くらいまでやってるわ」

「飲食店は現実世界と結構同じ感じなんだな……なんだこのゲームめ
ちやくちやじゃないか」着いた、ここよ……」

「なんやかんや話していると着いたみたいだった、そこのはブリキの
おもちゃの看板でホビーとかかかれていた

「おもちゃ屋……？」

「そうよ」

「そういつて凜は店の中にはいつていた

「なんだおもちゃやというかなんか色々あるな……」

「中はおもちゃというより、機械類がいっぱいあった

「まあホビーということをやってるんだからいいんじゃない？」

「まあ凜の言う通り店主がよければいいのかな……」

「おっちゃん、G Pカウンター一つ！」

「凜がそう言ったので、そのほうを見ると六十台前半くらいのおっさ
んがすわって機械をいじくりまわしていた

「おう！G Pカウンターな1000GPだ」

「おっちゃんが機械を棚に置いてG Pカウンターを取りに行った

「1000GP？そんなに持つてるのか？俺」

「もってるわよ、ペアコン倒したんだから」

「と凜と話しているとおっさんが戻って来た

「ほい、G Pカウンター」

「と渡されたはいいがどう会計するのだろうか……」

「会計ってどうやるんだ？」

「小声で凜に聞いた

「G Pカードを渡せば平気よ」

「と言われたのでG Pカードをおっさんに渡した、ゲーム世界ではG
Pカードをクレジットカードと同じようなものっぽい、変な機械に
カードを入れて終わりだった

目当ての品も買えたことだし、店を俺たちは出た

「凜、買ったはいいけどどう使うんだ？」

GPカウンターの使い方を説明してくれなかった

「下のほうにカードを挿すところがあるんでしょ？そこに入れるのよ」

といわれたので下のほうにカードを挿してみた、そしたら画面に「NOW……LOADING」と表記されたので待ってみた

「ロード終わったわね」

凜がそう言ったので画面をみると153GPと表記されていた

「いま俺は153GP持つてるっつことか？」

「そうね……つかあんまりないのね」

そりやまだ来てから1日目だからな……

「とりあえず食事にしましょ」

ああそのためにあんだだけ苦労してモンスターを狩ったんだもん……

「ああ、早く飯にしようぜ……」

飯……？つかモンスターを狩ったわいいけど、そのまま食うのか？

「どう食べるんだ……？」

「切って焼くのよ」

切って焼く……？

「切るのはわかるが焼く？」焼くって火使うよな

「焼くのよ！私の能力を使えば楽よ」

ああ能力か……便利だな、火を起こさなくても火を使えるなんて……

「便利でしょ？」

「ああ、本当に便利だ」

俺の能力はなんなんだろうか……

「さて調理するわよ」

凜はそう言って刃渡りが二メートルくらいある刀で簡単にモンスターを切り裂いたその後能力の赤い石の力でさつとモンスターを焼いてしまった

「なんか豪快だな……」

「下手に手いれるより簡単に調理したほうがいいでしょ？」

まあその通りだな

凜と俺はさっさと食事を済ませた

「意外とうまかった」

モンスターというとあんまりいいイメージはないだろう

だが意外とうまい……

「でしょ」

凜は満足したような顔で笑って言った……そんなときの凜は可愛い思えた

「それよりこれからどうするんだ？」

飯食って……あとやることあったら……睡眠くらいか……？

「どうしようかしら……寝る？」

いまは九時だ普段だとこれからだぜ！……みたいな時間だ「いまから寝て早めに起きて食事の材料を探しましょうか……」

「そうだな……でもどこで寝るんだ？」

ここは周りに崖しかないような場所だ当然宿なんかはない

「野宿よ」

まあそうなるだろう……宿がないんだから必然的に野宿になる……

「そうだよな……でも危なくないか？」

ここはモンスターが出る場所だ……

「まあ確かに……でも平気よ」

凜は能力の茶色の力を使って家みたいなものを作った「え……すごいな……本当に便利だな」

俺は改めて凜に感心した

「さて……寝るわよ」

そう言っただけで凜は家に入っていた……後が続いて俺も入った

「適当に寝て、私はもう寝るから」

と言っただけで俺もそこらへんにねっころがった……今日は色々あった気がする……凜に出会ってまだ一日しかたってないんだな

なんかこの1日は何週間にも感じた……、そんなことを思いながら

俺は床についた……

「起きなさい！！ さつさと食材を調達しにいくわよ」俺は凜の声で目が覚めた……「いま何時だ……？」

「六時よ」

六時！？ なんつう時間だ…… 早すぎる……

「六時……寝る」

とりあえず寝ることを優先した……

「なにいつてるのかしら……？」

凜は怒っているようだ……だが気にせず寝よう

「無視するのね……？」

「無視してないよ 怒ってるのか？」

「怒ってなんかないわよ？ ほら笑ってるじゃない」自分では笑ってるようだが声は笑ってはなかった

「起きないと殺すわよ？」

そう言われたとき俺は背筋に寒気を感じた……、やばいいまの凜の言うことを聞かないと殺される……と直感した

「わかったよ……起きます」いまは素直に言うことを聞こう……

「素直で宜しい」

「んで……どうするんだ？」起きたはいいけどどうするんだろっか

……

「モンスターを狩るのよ」

寝起きでいきなりモンスターを狩るのか……

「俺は寝起きだぞ？ いきなりあんな奴らとやりあうのか？」

「朝ごはん食べたくないならいいわよ？」

確かに朝ごはんは食べたい……だが寝起きで足元もおぼつかない中でモンスターとやりあうのか……

「食べたくないの？」

凜はもう一度今度は強い口調で言ってきた

「食べたいです……」

なぜか俺は敬語になっていた

「じゃあ狩るしかないわよね」

「買うと言う手段はないのか？」

ごはんならわざわざ狩らなくとも買えば済むことだと思う

「買う？あなた153GPしかないのになにを買おうと言うのよ」

う……痛いところをつかれた　たしかに俺は153GPしかない…

…これは狩るしか無さそうだった

「わかったよ……狩るか」

「そうと決まればさっそく行くわよ」

と言って凜は家を後にしたので俺も後に続いた

「朝っぱらなのにモンスターなんているのか？」

「いるわよ」

そうなのか……結構モンスターも活発なんだな……

「まあ頑張るか……」

今日こそは俺も能力を解放したい

「いきなり発見」

凜がそう言ったのでそっちのほうを見ると巨大なカブトムシみたい

なのがいた

「なんだ…こいつ」

「こいつはメガカブト堅いわよ」

そのままの名前だな

「堅いのか……行けるか？」余裕よっう顔でこっちを見てきた、そ

の瞬間赤い石でメガカブトの顔目掛けて

炎を放った

一瞬にしてメガカブトは倒れた

「さて……次行くわよ」

「お、おう」

そして俺たちは八時くらいまで狩った

「だいぶ雑魚モンスターなら倒せるようになったじゃない」
俺も四、五体は倒せた

「ああ、だいぶな」

「じゃさつさと朝ごはんにしますか……」

「おう……つかもうヘトヘトだぜ」

二時間ほど動いただけでこんなに疲れるとは思わなかった、だいぶ体がなまっていた

「だめねえー、こんなんでばてるなんて、こんなじゃ対人ですぐ駄目になるわよ」

凜の言う通りだった……もう少し体力をつけなきゃな……

「つかさつさと飯にしようぜ……」

もう腹が減って死にそうだった

「それもそうね……」

と言うことで俺らは飯にすることにした

「ふう……腹一杯だぜやっぱモンスターの肉は旨いな」

味は相変わらずだった……今回はメガカブトという昆虫もいたが甲羅等を除くと意外といける味だった

「さてごはんも食べたし、今日はどうする？」

「俺はまだ来てまもないから……出来れば町を案内してほしいかな」
まだホープタウンのことはなにも知らなかった

「そうね……案内しましょうか」

「そうしてもらえるとありがたいな」

「わかったわ、じゃさつそく行きましょうか」

と言うことで凜に町を案内してもらうことになった、町にはBANKやGPカウンターを買ったホビーのおっちゃんの店や飲食店などがいっぱいあり九時だと言うのに人が結構いて賑わっていた、店なども早くから開いていて人が結構出入りしていた

「朝早いのに賑わってるな」「まあそりゃそうね……昼まで寝たりしてると襲われるわよ？」

まあそれもそうだな……これは常に警戒しないといけないようだな……

そんなことを思いながら歩いていると不思議な貼り紙を見つけた「今月はあっちむいてほい！ 優勝賞品はダイヤモンドダガーと5000GP」と書いてあった

「なんなんだ？この貼り紙」凜に聞いてみた

「ああ、これは月に一度の月例会だよ」

月例会……？ああ、ゲームサポーターがそんなことを言ってた気がする

「今月はあっちむいてほいらしいわね……今日だし参加してみる？」今日は七月三十一日……毎月、月の終わりにやるらしい……

「暇だし、参加するか……」時間は十二時からやるらしい

「手続きを済ませましょうか」

手続きがあるのか……まあそうだろうな

「そうしようぜ」

ということで俺らは月例会のあっちむいてほいに参加することになった

「さあ！毎月恒例の月例会！今月はあっちむいてほいです！」

ナレーターの声で月例会が始まった

みんな一斉にあっちむいてほいを始めた

あっちむいてほい……能力とかはまったく関係ない、ただの運で勝敗が決まる

俺は順調に勝ち進んでいった……凜は途中で負けたらしく違うところへ移動していた

俺は堂々決勝にまで進んだ、能力はなくとも運はあったらしい

「さあ！決勝です 今回生き残ったのはまだこのゲームに来て間も

ないルーキー 柊 鏡也！ もう1人は謎の美少女！ 湊 楓！」
とナレーターに紹介された「さあ、遂に決勝！ ルーキーが勝つか？ 美少女が勝つか？」

ナレーターの声をスタートに俺らはあつちむいてほいを始めた
「おお！勝ったのはまだ来て間もないルーキー！柊 鏡也！」
一斉に歓声が沸いた

「俺は勝ったのか……」

「さて優勝賞品はダイヤモンドダガーと3000GPになります」
俺は優勝賞品を貰った

凜が近くに寄ってきた

「おめでとう、鏡也 あなた運だけはあるのね」

運だけはって……

「一言多いぞー」

「ごめん、ごめん、おめでとう！」

「ありがとう」

それにしてもダイヤモンドダガー……強いのか？

「ダイヤモンドダガーか……」

「なによ？かなりレア武器よ？」

「そうなのか……？」

「そうよ！ ダiamondを刃に使われていてなんでも切れると言
われているのよ？まあ能力で作られた武器に勝てるかはわからない
けど……」

いくら強い武器でも能力には勝てないか……

「そうなのか……」

「そんないいダガーを手に入れたんだわ、私のダガー返してくれな
い？」

「そうだったな、すまん、ありがとう」

「それで能力が解放されてなくても少しは強いモンスター勝てるで
しょ？」

「そうだな……」

他愛のない話をしながら町を歩いているといきなり話をかけられた

「おい！その坊主」

「坊主？俺か？」

黒い服に身をまとった黒髪短髪の男が声をかけてきた

「お前しかいないだろ？」

いきなり喧嘩を売った口調だな……

「なんだ？」

「ダイヤモンドダガーをよこせ」

「なんだと！？」

そう言った瞬間そいつが消えた……

凜が変な声をだした

「ダイヤモンドダガーを渡さないとこいつを殺す」

凜が人質に取られた

「凜ッ！！」

「大丈夫……ダイヤモンドダガーは渡しちゃだめよ」凜が必死にそう言った

「ほう……こんな状況でよく言えたもんだ」

たしかに凜が人質に取られた今、この状況はまずい

「おい……凜を離せ」

俺はキレそうだった

「さっさとダイヤモンドダガーを渡しな、そしたら解放してやるよ」

「ざけんな……」

「あ？もう一回言ってみろ」「ふざけんなってんだよ！！」その瞬間、俺の体から湯気が出るような熱さになった

「鏡也！？」

「……殺す……お前を殺す」俺はそう言って凜を人質に取っている奴に突っ込んで行った

「ふつなめられたもんだな」そういつて奴は俺を軽く避けた

「なに……！？」

次はもつと早く……

俺はそう思いながらまた突っ込んで行った

「何度やっても……」

同じだ、と奴がそう言う前に俺は奴を一発殴った

「なんだ……早くなってやる」

「黙れ……さつさと凜を離せ」

「お前がダイヤモンドダガーを……ッ」

また奴が言い終わるまでに一発殴った、そのまま俺は凜を奪い取った

「やるじゃねえか坊主……俺はクロお前は」

「お前に名乗る名前はない……ッ」

「そうかいそうかい、まあ今回は許してやるよだが必ずダイヤモンドダガーは頂く」

そう言っただけでどこかに消えた……

「凜……大丈夫だったか？」あれ……目の前が霞んで見える……

俺はそのまま意識を失った

「鏡也……！」

俺は凜の声で目覚めた……「凜……大丈夫だったか？」俺は凜の心配で自分の心配をする暇はなかった

「私は大丈夫よ……鏡也は？」

「俺も大丈夫だつかどのくらい寝てたんだ？」

もう周りは明るくなっていた

「丸一晚寝ていたわ」

かなり寝ていたようだ……

「つか鏡也、能力を解放できたんじゃない？」

凜は疲れたのか壁に腰を掛けながらそう言った

「そうかな……俺でもよくわからないんだ」

俺は凜が捕まって苦しそうにしていたから助けたいと思った、そしてたら全身の血が沸騰するように熱くなった……

そんなことを思っていたら凜が

「なんか変わったところはないの？」

と話を掛けてきた

「今は特にないかな……」

今の俺はさっきまでの俺とは違って能力が使えないときの俺と同じだった

「そっか……てつきり能力が解放したのかと思ったんだけどな」

と凜が残念そうな顔で言った

「ごめんな……」

「鏡矢が謝るようなことじゃないわよ！」

「そうか？凜に迷惑かけてばっかな気がするんだが……」

悪いという気持ちでいっぱいだった

「まあそれはそうね」

え……俺はてつきり『そんなことはないわ』的なことをいうと思っていたのだがまさかこんな返事が帰ってくるとは思いもしなかったため哑然としていた

「そんな顔してどうしたのよ」

俺がそんなことを思っていたとき表情にでていたのか凜がそんなことを言ってきた

「いいや、なんでもないよ」

「そう？迷惑かけてるんだから早く能力解放しなさいよ！！」

またズバツと言いやがった……まあ確かに迷惑はかけているかもしれない……いやかけている……まあ俺が能力を解放する以外に迷惑をかけないようにするすべはないのだが……「まあがんばるよ！なるべく凜に迷惑かけないようにな」

「なるべくじゃないでしょ！なるべくじゃ……まあ応援してるわよ」

最後は笑顔でそういった、これも凜なりの気遣いとかなのかなと俺

は思った

「おう！応援サンキュー」

「ど、どういたしまして」

凜が照れている新鮮だな……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2887w/>

Game of Gather of Wish

2011年10月9日15時55分発行